

エコクリティシズム研究学会

事務局便り No.4 July 2014

<http://www.ses-japan.org/>

第 27 回エコクリティシズム研究学会大会特集号

事務局便り第 4 号をお届けします。今年度大会のレジメとお願い、各種委員会情報を掲載しています。この事務局便りと『エコクリティシズム・レビュー』No7 は、大会と総会資料ともなっていますので、必ずお持ちください。

第 27 回大会を迎えて

SES-J(日本エコクリティシズム研究学会)は、1994 年ささやかな研究会として始まり、やがて学会となり、今年で 20 年経過いたしました。お届けしたジャーナル『エコクリティシズム・レビュー』No7 は、報告誌第 1 号から数えて 11 号目にあたります。「メルヴィルと環境」やブラジル、アメリカからの旅の寄稿等とともに、特集「21 世紀のエコクリティシズムの実践」は、学会が去年から総力を挙げて取り組んだもので、スロヴィック先生によると現在第 4 波 (the 4th wave of ecocriticism) に突入した“material fundamentalism”を特質とするエコクリティシズムの、最前線を形成する多様な論文を紹介した、解説と研究動向の報告集となっています。

さて 20 年を機に先般役員会で顧問の新設が決まり、Scott H. Slovic 先生と巽 孝之先生にご就任いただくことになりました。お 2 人の先生はこれまでも、会の企画や出版に際し編集や執筆の労を惜しみなくされてきましたが、今後ともご講演や会の方向についてご助言を戴けることになりました。今回神戸市外国語大学のご協力で松永京子会員と、在阪の浅井千晶会員、深井美智子会員のご尽力で、顧問の慶應義塾大学教授、巽 孝之先生の公開講演会を含む大会を開催できますことは、真に記念すべきことで、広島以外の開催は、東京、松山に次ぐものです。

特集「21 世紀のエコクリティシズムの実践」の「まえがき」とホームページ英文の学会の趣旨にも触れましたように、現在エコクリティシズムは世界と地球の運命を左右する環境問題と思想状況、それと取り組む文学と文化批評全般を、エコロジーの視点からカヴァーする、大きな潮流全体の呼称となりつつあります。会発足時には想像もできなかった複雑で重い課題が、この学会の目的を示す名称には内在しております。周知のようにアメリカではこの分野の草分けである学会誌、*ISLE* が、ヨーロッパでは EU エコクリティシズム学会 EASLCE から ecozone@ が、インドでは *Indian Journal of Ecocriticism* が、さらに超域的な *Journal of Ecocriticism* (<http://ojs.unbc.ca/index.php/joe>) などが発刊、電子発信され、エコクリティシズムはまさに惑星的な展開をみえています。本会の小さな歩みと『エコクリティシズム・レビュー』も、このような世界の海に連なる波の一つを形成するものとなることを目標として、今後とも全員野球の精神で活動していきたいと考えています。 (学会代表・伊藤詔子)

~~~~~

レジメ (発表要旨)

2014 年 8 月 9 日 (土)

**研究発表** 11 時 10 分—12 時 55 分

## 1. 「アメリカのフードシステムとオゼキの作品」

岸野英美（松江工業高等専門学校）

エコクリティックの Janet Fiskio は、自身の論文の中で、アメリカにおける食をめぐる問題に対して最も革新的に行動を起こすのは、フードシステム境界の往来者であり、彼らは悪状況に陥っている農業や都市を、農業を管理する側から、言い換えれば、主流に従属するフードシステムの中心者たちから脱領土化し、集団的行為の場所を構築すると論じている。しかし、Fiskio が言及するフードシステム境界の往来者は、自ら行動できる者たちに限定されている。こういった境界の往来者の中には、何らかの事情で自ら声を上げることができないが、自らを取り巻く環境や仲間の力を借りて行動する者も含まれるのではないだろうか。その一例が、Ruth L. Ozeki の長編小説第二作 *All over Creation*, 2003 の登場人物モモコである。本発表では、Fiskio の議論に依拠し、モモコをフードシステムの境界を往来する人物としてどの程度まで捉えることができるかを分析し、その役割をみていきたい。

## 2. 「ニュークリア・サイクル：B. ワンガーの連作小説にみる惑星思考」

一谷 智子（西南学院大学）

世界のウラン資源の約35%が埋蔵されているといわれるオーストラリアでは、ウラン採掘の段階から先住民は核被害に晒されており、1950年代のイギリスによる核実験も、先住民コミュニティに甚大な被害をもたらした。本発表では、先住民への二重の核被害をニュークリア・サイクルと呼ばれる連作小説に表象したセルビア系移民作家B. ワンガー (B. Wongar) を取り上げる。ワンガーは、多数の小説や詩、戯曲を出版し、一定の国際的評価を得た作家であるが、オーストラリア国内においては、リテラリー・ホークスとみなされ十分に評価されてはこなかった。本研究発表は、作家自身へのインタビューと収集した資料をもとに、ワンガー作品の再評価を目指すとともに、ガヤトリ・スピヴァク の概念を敷衍して用いながら、本作家のもつ越境性と惑星的想像力、ポスト・ナショナルな主体性が可能にした核への批評性を考察してゆく。

## 3. 「Mark Twain の『自伝』にみる記憶に刻まれた風景」

浜本隆三（福井県立大学）

自伝の執筆とは通常、個人の経験を言語化し、自己の人生を公的文脈において解釈する作業といえる。この自己表象化の過程において、個人の記憶はしばしば、公的・国家的記憶へと接続される。*Autobiography of Mark Twain* 第1巻の前半部も例外ではない。ところが Twain は、幼少期を過ごしたあるパストラルの回想を経て、過去と向き合う姿勢を 180 度転じる。すなわち、記憶を「よみがえらせる」主体性を放棄し、「よみがえる」記憶に従属したのである。結果、彼は 2000 ページを超える自伝の口述筆記に成功した。発表では、Twain が記憶に主体性を譲る過程を、Quarles Farm でのエピソードを追いながら明らかにしたい。

### 特別講演 13 時 40 分—14 時 40 分

#### 「カッサンドラ・コンプレックス——予言の文学と環境批評——」

巽 孝之（慶應義塾大学）

2011 年に起こった 3.11 同時多発災害の直後、わたしは笠井潔氏と語り、第一線の SF 作家たちの寄稿を結集し小松左京の遺稿となる序文を掲げた『3.11 の未来——日本・SF・創造力』（作品社、2011 年 8 月）を共同で編纂した。その時に着想したカッサンドラ症候群ともいえる心性史は、未来予測の文学とともに環境批評にとっても有益であろう。新たな視点より、この主題に再び取り組んでみたい。

#### " Cassandra Complex: Literature of Prediction and the Frontiers of Eco-Criticism"

Takayuki Tatsumi (Keio University)

In the wake of 3.11 multiple disasters, I and Kiyoshi Kasai, a major detective fictionist in Japan, co-edited *The Futures of March 11: Japan, Science Fiction, Creativity* (Sakuhinsha Publishers, August 2011), a collection

of insightful essays by science fiction writers and critics with Sakyo Komatsu's preface, his posthumous text. This project gave me a chance to come up with the mental history of Cassandra syndrome, which illuminates the possibility of literature of prediction and the frontiers of eco-criticism. My lecture will attempt to renovate this idea from a wider perspective.

**シンポジウム** 14時50分—16時50分

**"Ecology, Speculative Fiction, and Ecocriticism"**

**Chair: Michael GORMAN (Hiroshima City University)**

In "Ecology, Speculative Fiction, and Ecocriticism" panelists will examine science fiction texts from diverse environmental perspectives. The impact of climate change on earth and humanity's ultimate response to this crisis is the focus of David Farnell's paper, "Re-Terraformation of Earth in Kim Stanley Robinson's *Blue Mars* and *2312*." In "Posthuman Worlds: Coexistence and Co-evolution in Ueda Sayuri's *The Ocean Chronicles*," Kazue Harada will discuss the ways science fiction challenges heterosexism and anthropocentrism by offering alternate ways of viewing human relationships and non-human forms of life. In "An Ecocritical Reading of Kurt Vonnegut's Science Fiction," Satomi Nakayama aims to broaden our understanding of the popular American social satirist by mining his novels for ecocritical concerns. Shoko Itoh will serve as respondent on the presentations.

**"Re-Terraformation of Earth in Kim Stanley Robinson's *Blue Mars* and *2312*"**

**Lecturer: David FARNELL (Fukuoka University)**

Kim Stanley Robinson's novels *Blue Mars* (1996, third in his *Mars Trilogy*) and *2312* (2012) feature the exploration, colonization, transformation, and even creation of other worlds throughout our solar system, but ultimately they are about Earth and its people. As a writer, Robinson is very concerned with the environment, and many of his novels are themselves works of ecocriticism in a fictional mode. In the futures depicted in both of these novels, Earth has suffered from the effects of global climate change. But while those who have left Earth to create new ways of living might be expected to abandon their homeworld, it is these explorers and colonists who know better than any the delicacy of managing a precarious environment, and whose skills are brought to bear in restoring Earth's ecosystem as much as possible.

**"Posthuman Worlds: Coexistence and Co-evolution in Ueda Sayuri's *The Ocean Chronicles*"**

**Lecturer: HARADA Kazue (Washington University, St. Louis, Missouri)**

Timothy Morton suggests that an entire living system can be described as a "mesh"—the interdependence of life forms—"a very curious, radically open-form without the center or edge" (22). In her series *The Ocean Chronicles* (2010, 2013), Ueda Sayuri (b. 1964) demonstrates a variety of coexistent relationships, after a drastic environmental change, between humans and non-humans (e.g., between humans and autosapients or those with artificial intelligence) or between humans and fish-boat-like creatures. Borrowing from Timothy Morton's concept of "mesh," or the interdependence of life forms, and from Donna Haraway's "companion species" (including transgenic influences between humans and other species), this paper will explore the ways in which the text can challenge an anthropocentric way of seeing humans and non-humans by blurring the borders among life forms. It will also discuss these interdependent relationships as a substitute for heteronormative reproductive relationships, as many women science fiction writers attempt to avoid representing women's biological reproduction.

**"An Ecocritical Reading of Kurt Vonnegut's Science Fiction"**

**Lecturer: NAKAYAMA Satomi (Japan Coast Guard Academy)**

The American writer, Kurt Vonnegut, is most frequently studied in relation to sociopolitical satire and science fiction. Though less commonly discussed in relation to the environment, Vonnegut makes frequent remarks to natural surroundings, environmental change, animals, microscopic organisms, and extraterrestrial life in novels like *Galapagos*, *Cat's Cradle*, *Sirens of Titan*, and *Slaughterhouse-Five*. In this paper, I will explore the rich potential for reading Vonnegut's fiction from an ecocritical perspective. Ecocriticism can help reveal the unique representation of the environment and living things in Vonnegut's works.

~~~~~

☆ご報告☆

編集委員会より

執筆者と編集委員会のご尽力で『エコクリティシズム・レビュー』No7が完成しました。ページの大半は特集「21世紀のエコクリティシズムの実践を2誌にみる」で、『アメリカ文学——エコクリティシズム特集号』と『21世紀の環境批評』についてです。昨年のワークショップ報告の拡大版で、執筆者12人と編集委員8人の体制で臨み、編集に約半年をかけ、参考文献として利用できるよう記述の統一を目指しました。ここから、私たちそれぞれの新たなエコクリティシズムの実践が始まることを願っています。ご感想は、No.7編集委員（伊藤、大野、岸野、熊本、真野）までお寄せください。No.8にも奮ってご投稿をお願いいたします。

出版委員会より

出版企画〈エコクリティシズム研究叢書〉について助成が決定した2冊を報告します。

1. 印刷中

書名『スコット・スロヴィックは語る——ユッカマウンテンのように考える』

エコクリティシズム研究叢書4

編訳者・中島美智子、著者まえがき、訳者あとがき、スロヴィック著作リスト付き。

解説 伊藤詔子、2014年中刊行予定、英宝社。

2. 編集中（前号で報告済）

書名：『災害と文学—日米の応答と証言—』（仮）エコクリティシズム研究叢書3

編著者：熊本早苗／信岡朝子

執筆者：伊藤詔子／小川春美（岩手県立大学）／ゴーマン、マイケル／トンプソン、クリストファー（オハイオ大学）／中垣恒太郎／中野和典（福岡大学、原爆文学研究会）／松永京子（50音順）

刊行予定：2015年3月末日、英宝社。

シリーズ全体の構成と予定については、大会総会にて報告します。

事務局より

[会費及びジャーナル代金納入のお願い]

会費（年会費4000円、学生会員は3000円、入会金1000円）を未納の方は、至急納入をお願い致します。ジャーナルをお買い上げ頂いた会員には振込用紙を同封しておりますので、よろしくお願ひします。

振込先（郵便局）： エコクリティシズム研究学会 口座番号 01380-4-96525

[出版活動へのご支援について]

学会の出版活動（現在はエコクリティシズム研究叢書1～8）に対する御寄付のご意志のある方は1口2000円で口数はご自由に、今回の叢書の出版が終わる2017年まで随時受け付けています。学会振替口座用紙に寄付とお書きいただき、会計報告でお名前をご報告してよいかどうかについて、名前を報告可、または匿名とご指示下さい。大変お手数ですが、どうぞよろしくお願ひ致します。

書き方例： 寄付1口2000円、名前報告可。 寄付2口4000円、匿名。等。

[来年度大会について]

来年度 2015 年大会は 8 月上旬（8 日が第 1 候補）に広島地区で開催予定です。ワークショップ、研究発表の希望者は浅井副代表（c-asai@cs.kinran.ac.jp）までお申込み下さい。締め切り： 本年 12 月末

[ISLE 公開読書会について]

熊本早苗氏には長年にわたり ISLE 読書会をお世話して頂き、最新の研究情報を得て、会員同士の意見交換をすることができました。その労に対し深く謝意を申し上げます。今回はプログラムの通り、8 月 8 日（金）ホテル北野プラザ六甲荘にて公開読書会を行いますので、多数のご参加をお待ちしております。今後、ISLE に限らず作品読書会など会員間で自由に運営していければと思っていますので、積極的なご意見を頂けましたら幸いです。（水野）

取り上げる号と担当は以下の通りです。

ISLE, VOLUME 20.3(Summer 2013)

(敬称略)

担当	論文名	著者	ページ数
横田 由理	Waste Aesthetics: Form as Restitution	Susan Signe Morrison	464-78
伊藤 詔子	Sparing Words in the Wasted Land: Garbage, Texture, and Écriture Blanche in Auster's <i>In the Country of Last Things</i> and McCarthy's <i>The Road</i>	Véronique Bragard	479-93
水野 敦子	On <i>The Road</i> to Santa Fe: Complexity in Cormac McCarthy and Climate Change	Derek J. Thiess	532-52
松永 京子	Don't Climb Every Mountain	Elizabeth A. Wheeler	553-73
深井 美智子	The Ecosomatic Paradigm in Literature: Merging Disability Studies and Ecocriticism	Matthew J. C. Cella	574-96

[変更届のお願い]

住所やメールアドレス・所属等に変更があった方は、平瀬洋子宛て（danbara@mpd.biglobe.ne.jp）に必ずご連絡下さい。

[研究情報について]

会員の出版（単著・共著）・書評・学会などの情報は、ご本人の連絡に基づき研究情報として会員にメーリングリストと HP でお知らせしますので、水野敦子宛て（mizuno@sanyo.ac.jp）にご連絡下さい。

☆☆会場校委員からのお願い☆☆

- ・発表者はハンドアウトを 50 部ご用意ください。余部は著者がお持ち帰りになり、再利用して下さい。
- ・パワーポイントを利用される発表者は、USBメモリーに保存し、事前に会場のパソコンでテストしておいて下さい。
- ・昼食は各自ご用意ください。近くに、コンビニ、軽食堂、マクドナルド、ケンタッキー・フライドチキン、ダイエーなどがありますのでご利用下さい。

懇親会のお返事はこちらへ

浅井千晶氏（c-asai@cs.kinran.ac.jp）、深井美智子氏（symphony232@ga2.so-net.ne.jp）へ同送

締切： 7 月 15 日（火）

~~~~~  
2014 年 7 月 1 日 エコクリティシズム研究学会事務局発行

エコクリティシズム研究学会 代表 伊藤 詔子

事務局 〒738-8504 広島県廿日市市佐方本町 1-1 山陽女子短期大学 水野敦子研究室 mizuno@sanyo.ac.jp

〒739-0321 広島市安芸区中野 6-20-1 広島国際学院大学 平瀬洋子研究室 danbara@mpd.biglob.ne.jp